

神を恐れて生きる/ アナニヤとサフィラ事件

ペンテコステの聖霊降臨とともに出発した新生キリスト教会は、聖霊のダイナミックな力に満たされた使徒たちの力強い指導の下に着々と進展し、その数は男だけでも5千人以上にまで成長した。信じた者の群れは互いに恵みを分かち合い、「心も思いも一つにして」うるわしい愛の共同体を形成していった(4:32? 37)。

ところが、そこに悲しむべき出来事が起こる。これがアナニヤとサフィラの事件である。この事件はしばしば非キリスト者の間に神に対する反発とペトロ(教会)の権威に対する批判を引き起こして来た。キリスト者の間でさえも、アナニヤとサフィラが確かに罪を犯したとしても、その死はあまりにも苛酷であると考えて当惑する人々がおり、人々の神へのつまづきを何とかやわらげようとして、その死を合理的かつ自然的に説明しようとしてきた。すなわち、二人は、神によって直接的にさばかれ断罪されたというより、隠していた罪を暴露され恐怖のあまり心臓発作を起こしてショック死したというのである。

しかし、たといそうだとしても、初代教会は明らかに彼らが神によってさばかれたと認めていた。アナニヤとサフィラの罪は人間に対するものではなく神に対するものであり、それは「聖霊を欺き」(3節)、「神を欺き」(4節)、「生の霊(御霊)を試す」(9節)神性冒瀆の罪であること、アナニヤとサフィラに道徳的審判を下したのは使徒ペトロではなく、神であることを彼らは信仰をもって受け止めた。それ故、彼らは神の聖なる臨在に触れ、みな非常に恐れに満たされた、とレカは記している(5, 11節)。

この出来事は、旧約聖書ヨシュア記に記されているアカンの事件を思い起こさせる。神の選民イスラエルがエリコの町を占領したとき、アカンは、予め警告されたにも関わらず、神の命令に背いて、神への奉納物とすべきものを密かに取って着服した。その神への冒瀆の故に彼は神によってさばかれた(ヨシュア7:1以下)。この厳粛な出来事を通して、イスラエルは、神の民として「神の聖なること」を徹底して学ばなければならなかった。

アナニヤとサフィラのさばきと死は、新生キリスト教会にとって実に悲しい出来事であった。しかし、その事を通して彼らもまた、神の聖なる臨在の下に生きるということがどういうことであるかを厳粛のうちに学ばねばならなかった。「そのことを耳にした人々は皆、非常に恐れた」(5節)教会全体とこれを聞いた人々は皆、非常に恐れた」(11節)とレカは繰り返し記している。

今に生きる私たちもまた、この出来事を通して、神の前に聖く真実に生きることの大切さ、神をおそれて敬虔に生きる生活を謙遜に学びたいと思う。使徒パウロがガラテヤの信徒たちに語った厳粛な言葉を私たちも忘れないようにしましょう。思い遣いをしてはいけません。神は、人から侮られることはありません。人は、自分の蒔いたものをまた刈り取ることになるのです」(ガラテヤ6:7, 8)。使徒ペトロの言葉も思い起こしたいと思う。「あなたがたを召して下さった聖なる方にならって、あなたがた自身もあらゆる行ないにおいて聖なる者となりなさい。聖書に「わたしが聖なる者であるからあな

たがたも聖なる者となるべきである』と書いてあるからである」(第1ペトロ1:15、16
口語訳)。